



こんにちは。



ぼくたち、日本から来ました。

撮影協力：P.D.Agency

【四・五面に続く】

第5巻第12号
通巻第60号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番4号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

想像力こそが何にも増して大切なのだし、人間を人間たらしめる要因なのである。そのようなことを、あちらこちらで言い散らし、書き散らし。思いつきで例を挙げれば、シャーロット・ランプリングのヴェルマに痺れたり、ドン・キホーテに泣いたり笑ったりできるのも、銀座イエナで七時に……などと待ち合わせる事ができたのも、年末ジャンボを抱いて夢を見ることができたのも、全て想像力のおかげである。なおもこまかく考えてゆけば、人間の活動の大半は想像力をバツクグラウンドに持っていることに気づくだろう。例えば、円形の金属片や長方形の紙切れを物品やサービスと交換できるのも、そこに人々の想像力が働いているからである。その目に見えないシステムを理解できない人には紙片に書かれている文字が壹萬円であろうと一円であろうと大差なく、その紙切れと何かを交換してくれと頼んでみても詮無きことである。時計の針が何かを意味すべく動いていると把握できるのも、そこに時間という概念を持ち込んでこそそのことであり、想像力のない人には未来も過去もあるはずはなく、当然の帰結として、時計もカレンダーも用をなさない。試しに、我が家のでぶ猫の鼻先に現金や時計をぶら下げてみよう。ほら、何の興味

も示しやしない。目の前に出されれば、条件反射でにおいを嗅いでしまうものの、欠伸をして立ち去るのが関の山。ところで、彼女がお金や時計の意味を解しえないのは幸福なのか不幸なのか。

ないものを見る力、考える力が、人間社会を、良く言えば豊かに、悪く言えば必要以上に複雑にしているのである。幸せが増えたのも確かだろつが、同時に、猫にはない類いの不幸が増えたことも確かだろつ。

実際に行ったことがない土地や会ったことのない人について話し合つことができるのも、もちろん、想像力のおかげである。

イラクという国に行ったことのある人は私の周囲にはほとんどいないのだけれど、今では誰と話すのにも前置きは必要ない。行ったことのないのに、その国がどこにあつて、どんな国なのかと語り合えること、実はなかなか凄いとである。

見てきたわけでもないのに、大量の殺人兵器があると信じて疑わず、多くの人の声を無視して乱暴狼藉をはたらしてしまうブッシュ某という者の想像力たるや、まさに想像を絶する形容すべきか。空想癖が強く、わけのわからない

(最終面に続く)

今日の紙面から

一画 ロンドレポート

さくら

三画 からすライブラリー

CD 『キリンジ』

本 『ザ・レッド・ツリ』

映画 『太陽を盗んだ男』

四・五画

なまにこ

五画 語面

Worldは過去のなか

からす新聞は××××
が母体となつて、世界に文
化と芸術を発信すべく発行
しています。

誰でも自由に参加できま
す(無茶じゃない範囲で)。



さくらレーン

クリスマス特別企画で、友達と皆でアイス・スケートに行くことになった。そう言えば何年ぶりのスケートだろう？ 始めてやったのは小学校高学年で、最後にやったのが中一か、中二の時くらい。多分、合計四、五回くらいしか体験したことはない。既に三年もこちらに住んでおきながら、こんなに身近にイギリス初体験イベントがある事に驚いた。探せば幾らでも、まだこちらで体験していない事なんか見つかるかもしれない。

スケートは日本でも別に特別珍しいスポーツではないのだが、何故だかスケートに対して、西洋のものだと言う認識が自分にある事に気が付いた。どうしてだろう？ 自分であまりやらな

いというの理由の一つだろうが、洋画や小説など西洋の物の方がスケートをしている場面によく出てくるからかもしれない。ロンドンでも冬になるとサマセット・ハウスの建物に囲まれた中庭にスケートリンクが特設されたり、ハイド・パークでもスケートが出来たりする。スケートと聞いてサリンジャーの小説を思い浮かべた。僕にとってスケートとは、何だかそんな外国的なものである。それとは別に今回行った所はスケートが一年中出来る、いわゆるスケート場。そう言えば日本のスケート場事情がどうなのかはよく知らないのだが、こちらのスケート場は何か独特の雰囲気がある。加えて、あまり便利だとは言えない場所によくあったりする。決してモダンではなく、何だかちょっと色あせた空気。ちょっと危険な、どこか悲しげな感じ。まあ、行った場所が凄く安全だとは言えない地域だったのも当然その理由の一つ

ではあるだろう。お決まりの、スウェットのパーカーを着た黒人の兄ちゃん達や、ベイスボールキャップをかぶった白人のおっさん、決して高そうには見えない派手な服をきた女の子集団など、地域性がよくて味の異なる客層が新鮮に思えて妙にワクワクしてしまう。ちょうど開場時間前にやっていた、女の子チームのホッケーの試合が終わり、製氷されたリンクの照明が突然パツと消え、最新ではないディスコ風の音楽が流れ、照明がついた時点でそのワクワクは頂点に達した。こんな雰囲気は普段の生活では味わえない。何となく柄の悪く見える黒人のお兄ちゃんも、ぶつかりそうになっただけでお互いに照れ臭そうに「ごめん」などと言葉を交わすと、妙に親しく思えてしまう。生活感が溢れたお客さん、暮らした臭いがたつぷりのその空気の中で僕は、余り覚えていなかったスケートを十分楽しんだ。

今回、ずいぶん新鮮に感じたこの体験。で

も僕はこの空気を何処かで知っている様な気がする。これは決してロンドンだからではないはずだ。日本で、これを知っているような気がしていたのだ。少し経った後で、それは日本のボーリング場そっくりな雰囲気だったことに気がついた。地域性の高い場所、庶民的な遊び。自分たちがここでは外国人だからか、日本にいると何でもない事がやたらと強調されて見えるのは不思議だ。日本のボーリング場や、パツティングセンターに外国人が遊びに行ったようなものだろう。ただ人種と立場が入れ変わっただけ。そんな事が、特に危険だという意識には積極的に働くような気がする。もちろん今でも、一人では行きたくないのだが、昔さくらレーンにいたヤンキー兄ちゃん達より柄の悪かった人は一人もいなかった事を、ふと思い出した。

(神山)



THE RED TREE (Shaun Tan)

Lothian Books

ISBN 0 7344 0172 8

ISBN 0 7344 0539 1 (paperback)



ひょんなことから、日本語を勉強しているオーストラリアの女子学生の、翻訳コンテストの課題を手伝ったことがある。茨木のり子著の「言の葉さやげ」だった。手伝う側も力不足。曖昧で難しくて、結果は残念

ながら選外・・・。

顔も見ることがない友人だが、メールや手紙が時々届く。いつも上手な日本語で、手紙の文字は私よりうまいかも知れない。そんな彼女から、お礼にと絵本が届いた。

オーストラリアのイラストレーター、Shaun Tanの「THE RED TREE」と言う本だ。2002年のオーストラリアの児童図書賞で次点だったという。

ストーリーはとても単純だ。少女の部屋に、ある日、数枚の枯れ葉が舞い落ちる。やがて枯れ葉は、たちまち小さな部屋を埋め尽くし、少女を追いだしてしまふ。それから、少女をさまざまな人生の迷いや苦しみが襲う。これは、外からのというよりもむしろ、人が生きていく上での内面の試練

を表しているようだ。誰も自分を理解してくれないと感じたり、待っても待っても何も起きなかったり、かと思えば一瞬にしてトラブルに巻き込まれたり、すてきな事は皆自分を素通りして行くように見えたり。しかし、苦しみは突然終わりを迎える。生きる意味さえわからなくなりかけた少女が部屋に戻ると、小さな赤い木が芽を出している。そして、小さな木は、彼女自身の希望の力で大きなRed Treeになるのだ。

一見して、いわゆる子供向けの絵ではない。特に日本の絵本界では受け入れられにくいタイプの絵だろう。全体に重いし、時にシュールで、血の涙を流す巨大な魚(darknessの象徴として描かれている)や、死の海辺のような場所でガスマスクを被って瓶に入っている孤独な少女の絵など、小さな子供には怖いのではないかと思う。

だが、一まい一まいのページが、絵としてとても魅力的で力があり、楽しんで創られていると感じる。構図も、周辺のヘンなわき役達も個性的で、色彩の、暗さとあざやかさのバランスがいい。また、よく探すと、どんなに重く暗いページにも、必ず小さな赤い葉っぱが一まいづつ描かれている。これがこの本の鍵だ。そして、作者自身の信念でもあるのだろう。

テーマは単純すぎるようにも思えるけれど、一度開くと心に残る不思議な本だ。自分的に、いつもはこういう感じの絵はあまり求めないのに、ぎりぎりのところで「好き」の方に訴えてくる。日本の絵本ではなかなか味わえない印象かも知れない。

(長井理佳)



キリンジ / 『3』

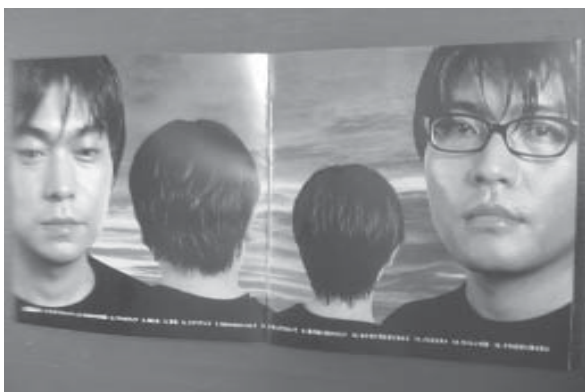
ワーナーミュージックジャパン

WPC6-10109



先日たまたまH.M.V.に寄ったらトリプルポイントデイだったので、これ、と思い、いろいろ買い忘れたCDを買ったのだ。その一つがこのキリンジの『3』である。

キリンジ、大ヒットする兆しナシ。このCDを聴くとそう思わずにいられない。万人にウケるような音楽ってのは分かりやすくなければならぬからだ。だけれど、こういうバンドこそが自称音楽マニアの琴線を弾ってやめなさい。世の中、捻く



そんなキリンジなんだが、たまに捻くれる絶妙な音の構成もさることながら、それに乗った声は恐ろしく良い。まるで大滝詠一のようなサララップでくるんだような高い声

が、曲を耳に軽やかに運ぶのだ。たまらない、その一言に尽きる。

さて、そのキリンジが去年、何を思ったのか武道館なんぞでライブをやったらしい。席が空いてたらしい・・・。やめとけ、やめとけ、武道館でなんて。ちっこいとこでいいじゃん。(と)

太陽を盗んだ男

1979年公開(東宝)

DVD: アミューズピクチャーズ

監督: 長谷川和彦

音楽: 井上堯之

出演: 沢田研二、菅原文太、池上季実子、秋吉久美子



日本人なのにバタ臭い顔の人っているよ。なんてことを言っても、通じなくなりつつあるのは、「バタ臭い」という語が死につくあるからか、日本人にあの手顔が珍しくなくなりつつあるからか・・・そんなことはどうでもいいのだが、何を隠そう、私はバタ臭い二枚目風味の顔を持ち、それなりにお笑いも行けてしまふ、そんな唄い手が大好きである。例えば、カールスモーキー石井、例えば吉井和哉。そんな私の趣味の原点を作ったのは間違いなく、ジュリーこと沢田研二である。

その彼が主演した名作がこれ。ジュリーの演技には、彼独特の照れ隠しのよ味があり、うまいわけではないがそれなりの存在感。この作品の中ではお

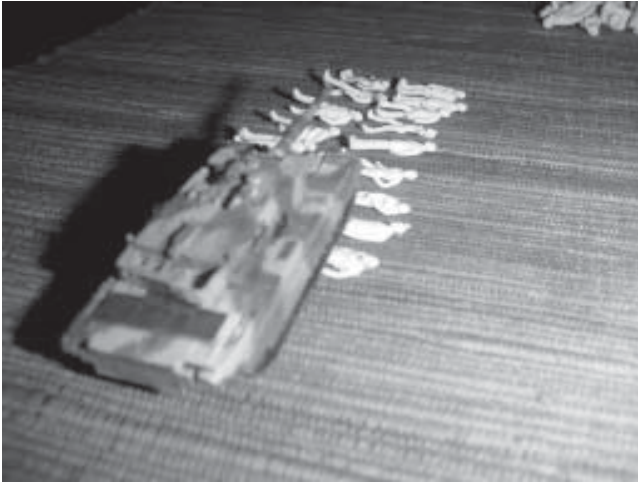
しみと切なさげばかばかしさにくるまれて、若さを武器に疾走する。そんなイメージ。書いてて背筋がぞつとするような気持ち悪いフレーズだな。だが、実際にそういう印象なのだからしかたない。

これは長谷川和彦が監督したたつた二本のうちの一つ。もうメガホンを取ることはないのである。ま、それも恰好いいけどさ。

(全主)



軍隊じゃないんだよ



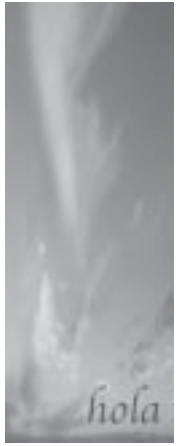
じゃあ、何よ？





うんざり





今年には沢山飛行機に乗った。機内に持ち込んだペットボトルが、空の上で膨らみ地上に降りると潰れてしまうように、その度ごとに身体全体が、脳みそまでも、膨らんだり縮んだりしたのかと思うと、あまり安心した気持ちはしない。このところ物事を忘れやすくなった原因は、こんなところにあるのではないかとすら思いたくなる。

スペインの南で仕事を終え、帰路マドリッド経由でパリへ着いたとき、預けたスーツケースが出てこなかった。荷物が乗継ぎの飛行機に遅れたようで、航空会社の事務員によると、遅い夜の便で運ばれてくるということだった。結局、次の日になって荷物は着かず、まさかと思つて夜遅くホテルに帰ったあとで不着を知り、クリスマスで賑わう夜のシャンゼリゼに下着を買いに出かけることになった。そして、あることがそれが滞在中ずっと、都合四日間も続いたのである。

帰国して既に二週間以上経とうとしているが、一向に音沙汰はなく、なくなった荷物はまだ出てこない。なんともお粗末なことであるが、航空会社のクレーム係の人間は慣れたもので、「九十パーセントの乗客の方には、荷物をお届けできている。」と平気で言う。九十パーセントでもどうでも、私にとっては着替えがあるかないか、百パーセントかゼロの出来事である。

それにしても、九十パーセントっていうのは、果たして胸を張れることなのだろうか。学校の定期試験でいつも七十点の生徒が、九十点をとつたら「百点満点のテストである。」それは立派なものかもしれないが、預けた荷物が九

十パーセントの確率でしか返ってこないというのは、百人の団体なら十人荷物をなくすということだから、それはもう預けるなど言っているようなものである。

マドリッドの空港というのは拡張を重ねた結果、迷路のように分かりにくくなっていて、国内線から国際線へ乗り継ぐのも一苦労だから、荷物がどこかで道に迷うのも当然かもしれないと思つ。前にも、暫く出てこなかったスーツケースが、少し離れた柱の脇にとくに置かれていたことがあった。どうも前の便で運ばれていて、そこに放置されていたらしい。遅れようとも早く運ぼうとも、彼らにはどうでも良いことなのだ。目の前に迷子のスーツケースがあつても、見えもしないというわけだ。

こんなことは知らないで済むほうがよいのだが、荷物がなくなつたな、と思つたら、バゲージクレームの事務所に行く。大抵は航空会社ごとのカウンターがあつて係員がいるので、荷物が出てこない旨を告げ、チェックインしたときの荷物のタグを見せる。この番号ですべて処理

されているので、当然のことではあるが、チェックインの時には、このタグと荷物に着いたタグの行き先を確認したほうがよい。

どんな姿かたち、色の荷物かということや、滞在先の情報などがコンピュータにインプットされる。荷物を送つてもよいという紙にサインさせられる。腐るものが入つてないとか、荷物だけ送つて他の荷物や乗客に迷惑がからないという念を押されるのだ。非は相手にあるとはいへ、送つてもらわなければならぬし、問題もないのでサインをする。怒つても無駄でエネルギーの損失なので、単に事務的にことを運ぶしかない。ただし貰えるものはすべてもらう。何せ着の身着のままなのだ。とりあえずの洗面用具とTシャツの入ったポーチをもらつて、空港を後にする。洗面用具には、オーデオの小さな小瓶などとも一晩の間違えを起こさぬための小物まで入つていて、フランスという国のお国柄を知りました。

チェックインで預かつた荷物を目的の空港ま

で届けることは、航空会社の義務ではなく、単に努力規定なのだそう。旅行会社に勤めていた友人に聞くと、飛行機が遅れて予定の乗り継ぎ便に間に合わず、現地での滞在を余儀なくされる時、航空会社は乗客にホテルをあてがうが、実は彼らにそのような義務はないらしい。サービスの一環としてイメージを損なわぬよう、空港からタクシーを手配し、提携のホテルまで連れてゆき、翌日また空港まで送り届ける。一昨年にはこれも体験した。バルセロナの郊外の、海沿いのリゾート風ホテルに泊められた。季節外れだったのだが。

荷物がなくなつて48時間経つと、搜索範囲を広げ世界中の空港でチェックをすることだ。21日を過ぎると、これはロストバゲージとして扱われて保証の対象となるようだ。こうなるとなかなか出てこない。航空会社による保証の限度は、預けた荷物の重さによって、1キロあたり二十USドルと国際的に定められているらしい。(見直しの動きもあるようだが、せいぜい倍にするという程度のものらしい。)(エコノミークラスだと二十キロプラス)がチェックインする荷物の限度なので、高々5万円程度の保証にしかならない。この他に、現地滞在中は、一日について上限がユーロまで日用品を買う権利を与えられると現地で聞いたが、帰国後確かめると、この上限もチェックインする荷物の補償額と同じに設定されているということだ。

自衛手段を講じるしかない。自ら保険に入り、絶対に荷物は預けない。預ける場合は、飛行機のそばまで持つてゆき、直接荷物室に自分の手に入れる。自分の手でないにしても、飛行機のすぐそばで受け渡しをするっていうの、結構いいんじゃないかと思つ。そして、どうしても預けなければならぬときは、ひたすら幸運を願うしかない。荷物は出てきたら儲け物なのだ。



こんなバスみたいな乗り方だと安心なのだ。



荷物はこんなふうに直接預ける。

would は過去なのか

今日もまた、かねてよりあなたをつけ狙うストーカーからこんな不吉なメッセージが・・・

I can see you.

He is not your man.

I am.

I would be your slave.

I love you, my sweetheart.

きみのことみえるよ。

そいつなんかきみにはふさわしくないって。

ぼくだよ。

ぼくならきみの奴隷になってあげるのにな。

あいしてるよ、ぼくのかわいこちゃん。

ちょっと待てよ。“I would be your slave.”が「ぼくならきみの奴隷になってあげるのにな」はおかしくない？ だって would って will の過去形でしょ。「ぼく昔はきみの奴隷だったのに」とかならわかるんだけど・・・。

まず第一に、would は確かに will の過去形だ。その意味は、「～するつもりだった」「よく～したものだ」など。

He said he would be my slave.

「彼、私の奴隷になるって言ったのよ」

We would take the same train.

「ぼくたちはよく同じ電車に乗ったよね」

だから、“I would be your slave.”は「ぼく昔はきみの奴隷だったのに」でもいい。だとすると「ぼくならきみの奴隷になってあげるのにな」はどういうことなのか。

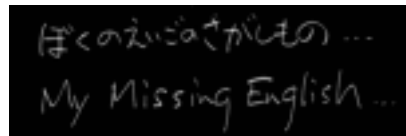
would にはもうひとつ、「あり得ないこと」を言う「仮定法」の would もあった。仮定法では、いまのことを言うときでも、時制を過去にする。つまりストーカーが言っているのはこういうことだったのだ。

If I were [was] him, I would be your slave.

「もしぼくが彼なら、きみの奴隷になるだろう」

過去ではない would は「だろう」

その意味は、「現状は実現してないけど、実現したら～『だろう』」



学校英語にわずれものありませんか？

なんだ、仮定法って言ってくればわかるよ、と思う人もいるかもしれない。しかし、“if ~”がないままに would が使われることは日常茶飯事なのだ。

ほかにも例を挙げてみよう。次のような言い回しが、文脈の中で過去のことでないと考えられるなら、以下の意味だと思っ
ていい。

飲み会で：

Another glass of beer would bring on gout.

「もう一杯のビールが、痛風のもとになっちゃったりするんだよなあ」(飲んだらまずいかなあ。どうかなあ)

悪魔：

This glass of beer would be the best of all medicines.

「この一杯のビールこそは百薬の長だと思うんですけどねえ」(ただし、あなたが勇気を出して飲んでくれたら話ですけどね)

インフレ・ターゲット論者：

The inflation target would make the economy better.

「インフレ・ターゲットが経済を良くしてくれると思うんですけど、たぶん」(導入しさえすれば)

反対論者：

Who would remember you?

「誰があんたを憶えてますかねえ」(いるなら教えてくれ)

タイソン：

I would beat Bob.

「おれならボブを負かしてやる」

スマップ：

To be a No.1 would ruin your life.

「ナンバーワンになると人生むちゃくちゃですよ」

ところで、こんなのはどうだろう。

Smoking would cause lung cancer.

「喫煙は肺ガンを引き起こすでしょう」(吸いすぎたりしたら)

タバコの注意書きでいかにもありそうだが、「もしも」という表現であるぶんインパクトが弱くなるのは否めない。実際に近年各国で採用されているのを見ると、

Smoking causes lung cancer. <アメリカ>

「喫煙は肺ガンを引き起こします」

(最終面に続く)

(七面から続く)

Tobacco use makes you impotent. <カナダ>
「タバコの使用はあなたをインポテンツにします」

といった直球表現で言い切っている。would だけでなく、「かもしれない」にあたるcan や may などの助動詞もつける隙間はない。ただし、南アフリカでは近頃こんな文句が採用され、世界中の禁煙団体から喝采を受けた。

Smoking can kill you.
「喫煙があなたを殺すってのはあり得ることですよ」

kill「殺す」とまでは、さすがに言い切れないということか。一応 can が添えられているが、これにならえば、

Smoking would kill you.
「喫煙はあなたを殺すとおもうんですよ、たぶん」(もし吸いすぎたら話ですが)

なら、いずれどこかで採用されるかも。

(望月)

Kanna
早稲田通り
中野通り
中野ブロードウェイ
中野駅 ↓

営業時間
平日・土曜日 11:30~15:00 / 17:30~25:00
日曜日 17:30~25:00
定休日 毎週火曜日 & 毎月第3日曜日

中野区新井1-30-6
第1三宮ビル1F
Tel: 03-5343-1316

プレオープン期間を経て、10月15日グランドオープン!!

「自分の行きたいお店が欲しい」
呑むの好き。人と話すの好き。
酒好きの仲間とともに自分のりそうの飲み屋を作りました。
飲み食いだけでなく、自作の美術品等の展示や、
ミニライブ、ろうどく劇等にもお使いいただけます。

物思いに耽溺しがちな私だが、彼はその何万倍も強烈な想像力……というより身勝手な幻覚でも呼ぶべきか……の持ち主である。恐るべし、米帝国、これほどの歪んだ頭脳を生み出すとは。待ちたまえ。日本にだって負けず劣らず大変な想像力の持ち主がいるではないか、ブッシュ。某の脳裡にゆらめく幻想を引鉄に、同じ阿呆なら踊らにや損々とはかりに、一心不乱に踊りに踊る小泉某という猛者が。一つの幻想が別の幻想を引き起こし、その幻想がさらに別の幻想を引き起こす。そんな具合に続く連鎖は、風が吹けば桶屋が儲かるの類の、何とも無稽の伝播をする。始まりは事実無根の、言ってみればちんぴら並みの言い掛かりであろうとも、コネティカット生まれの馬鹿息子(の嘘は七つの海を越え、日本でへっくしょん、イギリスでこほんこほん。結果、世界を揺るがす事態となってしまう。インフルエンザもびっくりの伝染力

(一面から続く)

である。あれよあれよという間に多くの命が奪われ、土地や建物は修復不能なほどのダメージを被り、世々受け継がれてきた文化は粉砕されてしまった。どんなに人念に再建計画を立てようとも、失われた文化を再現すること能わず、傷ついた人々の心を潤す術はない。潤うとすれば、火種を作った国の企業の懐くらしいもの。マッチ・ポンプとはこのことだ。実に恐ろしきは権力を握った愚者の幻想。
小泉某は、メリケン野郎の喚き立てる幻想なら、ないものさえないあるとしてしまっほどの空想癖の持ち主でありながら、眼前の大家の心情などには一切無頓着で、一握りの思いを巡らすことさえない。ないものさえない、と思つのも、あるものさえない、と思つのも、なるほど、確かにどちらも想像力のなせる業ではある。

自衛隊の派遣問題ではあちらこちらで喧々囂々。しかし、民衆がどんなに嘆こつとも

小泉某の妄想は揺るがない。どうしてどうして中々に立派な裸の王様ではないか。自衛隊が歓迎されないイラクの土地に立つ姿を想像しよう。何が見えるだろうか。安全なところなんてないんだから、もしかしたら殺されてしまいかもしれない。そんな意見をよく耳にする。それだけではない。彼らが殺してしまう側になってしまう可能性だつてあるのである。殺したり殺されたり、それが戦争であり、そこに赴くのが軍隊なのだ。そう言う人がいるかもしれないけれど……。

そろそろ、アメリカ的な金や暴力中心の社会はやめてみませんか。素直にそう思う今日この頃。ああ、一年の締め括りなのに、またもや暗い話題になってしまった。

ラブ&ピース。さよなら、アメリカ。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki,
architect

Voice: +81-3-3220-0644
Facsimile: +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
篠崎健一アトリエ

編集後記
からす新聞第五巻第十一頁(通巻第六〇号)無事、発刊できました。
新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。
次号発刊予定日は二〇〇四年一月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

ファミマ

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451

宝仙寺
ファミマ
おうめかいどう
中野坂上駅